

明日 への 話題

20年後の ミャンマーに 思いを馳せる



大和証券グループ本社
執行役社長（CEO）

ひびの たかし
日比野 隆司

「一日一歩、バガンはそこにある」ミャンマーの諺だ。バガンは11世紀から13世紀にかけて栄えたミャンマーの古都で、世界三大仏教遺跡の一つと称されている。一日一歩ずつ歩いていれば、必ずバガンに着く。日本語で言えば、「千里の道も一歩から」といった所だろうか。

ミャンマー民主化の流れを受け、ヤンゴン証券取引所を2015年10月に開業しようというミャンマー政府の熱意に、日本は官民一体で応えようとしている。金融庁、財務省、日本取引所グループの方々とともに、当社も微力ながら取引所設立をご支援させていただいている。

縁あって、ミャンマーには1996年から現地法人を置いているが、ミャンマー政府の方々とお会いするたびに「20年に及ぶ支援に感謝する」と言っていた。オールジャパンの一員として、身が引き締まる思いだ。

アジア最後のフロンティアと呼ばれるミャンマーは、安い労働力、高い識字率、六千万の人口規模など、製造業の方々には生産拠点としても市場としても魅力的な国であろう。一方で、金融分野は、法制面・人材面から見ても未だ市場として魅力を測る段階ではないかもしれない。

ミャンマーの金融人材育成のため、昨年度からミャンマー政府の若手職員を留学生として受け入れている。つい先日、第一期生が帰国したが、途上国における人材育成の難しさを痛感している。何しろ、長く軍政下にあったミャンマーには、まだ証券市場がない。資本市場とは何か、株式とは何か、そもそも「株価が動く」という概念から始めなくてはならない。

実は、当社には70年代から80年代にかけて、シンガポール、韓国、中国、ベトナムなどアジアの国々の資本市場立ち上げの時期に、現地研修生の受け入れに携わった歴史がある。かつて当社に研修で来られたという企業トップの方が、今でも来日した際にわざわざ当社にお越し下さることがある。

ミャンマー資本市場整備支援にとって、2015年は終わりではなく始まりだ。これから経済成長を遂げるミャンマーとともに日本は歩いていく。息の長い信頼関係を築くためにも、常々ミャンマーに携わるスタッフには文化と歴史から学ぶよう指導している。

さて、日本は20年後、ミャンマーとどのような関係を築いているだろうか。その時は「40年に及ぶ支援に感謝する」と言っていたのだろうか。

今は2015年の取引所開業に向けて「一日一歩」着実に前進していくのみである。